様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月 １７ 日現在

機関番号：４５３１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｋ０２３７４

研究課題名（和文）英米映画の翻訳における沈黙の記述的分析

研究課題名（英文）Descriptive Analysis of Silence in the Translation of English-language Movies

研究代表者
安達　励人（Adachi, Reito）

倉敷市立短期大学・その他部局等・学長

研究者番号：６０２４９５５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：日米映画の吹き替え版において、音声非言語（背景音楽や効果音、パラ言語など）に加えられる脚色について量的観点と質的観点から分析した結果、まず、音声に施される脚色の程度には言語間で差があることがわかった。さらに、その差はジャンル間でも大きいことが判明した。次に、元となる音源は世界の地域単位で共通している場合がある一方で、同じ音源を用いた国同士でも、それぞれの言語文化の影響で作品中の沈黙の数や位置が変わることを明らかにした。そして、音声非言語に、削除をはじめとする様々な操作が加えられる要因として、異質な音声のローカリゼーション、音声同期、視覚と聴覚のメッセージの一致という3点を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
視聴覚翻訳（AVT）における音声非言語の研究は、映像やセリフの研究に比べて後発の分野であるが、本研究によって、マルチメディア時代における多重コードテクストの特性の一面が明らかになった。さらに、低文脈文化と高文脈文化との間の異文化コミュニケーション研究に、新たな基礎的知見を加えることにも貢献したと考える。あわせて、大量の音声データの特徴を効率よく俯瞰する方法として沈黙を分析指標として用いた点に、研究手法の新規性を認めることができるであろう。そして、本研究の結論によって、AVTにおける音声非言語に関する研究の必要性と意義が、一層明確になったと考える。

研究成果の概要（英文）：This study is aimed at analyzing, from both quantitative and qualitative angles, how acoustic nonverbal elements (e.g., background music, sound effects and para-languages) in American and Japanese movies are adapted in the process of dubbing. As a result, the following three conclusions are gained. First, there are differences in the degree of adaptation between languages, and the differences vary considerably from genre to genre. Next, while the original sound sources for dubbing can be divided into two groups (namely, the American and Asian versions and the European versions), closer comparisons of the dubbed versions reveal that the modification of acoustic elements is affected by the language and culture of each country, which is illustrated in the difference in the number and location of silences. Lastly, the localization of heterogeneous sounds, synchronization and message coherence between image and sound are identified as the main factors of sound adaptation.

研究分野：翻訳学

キーワード：視聴覚翻訳　映画　音声　沈黙　吹き替え

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１，Ｚ－１９（共通）

科学研究費助成事業　研究成果報告書

令和２年７月１４日現在

１．研究開始当初の背景

映画やテレビドラマなどの視聴覚翻訳（audiovisual translation，以下 AVT）では，音声セリフだけでなく，映像や音響を含めた多重コード全体（字幕や画面上に映り込んだ文字などの視覚言語，映像や写真などの視覚非言語，音声セリフや歌詞などの聴覚言語，背景音楽や効果音などの聴覚非言語の各情報）が翻訳の対象となる。ところが，印欧語を中心とする伝統的な翻訳研究は書記媒体としてのセリフへの関心が強く，AVT における映像や音響という視聴覚的要素や、コード間の相関についての研究は後発分野であった。AVT において音声面の様々な研究が充実してきたのは，ようやく今世紀に入ってからのことである。例えば，翻訳と音楽（De los Reyes Lozano 2017）や，吹き替えにおけるプロソディー（Sánchez-Mompeán 2020），声質（Pennock-Speck and Del Saz-Rubio 2009），制作現場の状況（Bosseaux 2018）など幅広いテーマで意欲的な研究が進められている。

映画における音声要素は，セリフや映像が伝達する情報を補ったり強調したりする補助的な役割を担うと考えられがちである。しかし，背景音楽や効果音には、観客の感情に直接訴えかける力があり，セリフや映像とは異なる独自のメッセージを発信する機能を担うこともできる。この特性は、異文化理解においては，耳になじみのない音声が円滑なコミュニケーションの妨げるという、ネガティブな作用も起こし得る。このような観点から見ると、異文化コミュニケーションに及ぼす音声要素の影響は思いのほか複雑で豊かであることから、AVT における有意義な分析の対象となると考えられる。ところが，日米間における日本語と英語の映画の吹き替えを扱った研究においては，音声面に焦点をあてたものは数少なく，特に，非言語的要素としての沈黙をテーマとした調査は道半ばと言っていい（Adachi 2012，2016，2020）。会話における沈黙は，日本をはじめとする高文脈文化とアメリカを含む低文脈文化の差異が顕著に表れる要素であることからも，異文化コミュニケーション研究に新たな知見を加える要素となることが期待される。

２．研究の目的

まず，アメリカと日本の映画（英語版と日本語版）の原語版と吹き替え版における音声非言語としての沈黙に着目する。吹き替えのプロセスにおいて作品中の沈黙がどう変化しているかを，量的な視点から言語（国）別・ジャンル別に比較し，それぞれの主要な特徴を明らかにしたい。

次に，日本語と英語以外の言語への翻訳過程において、日米映画の沈黙に加えられる脚色の傾向を多言語（国）間の比較から把握するとともに、その結果をもとに先に実施した言語（国）別・ジャンル別の分析から得られた結果を再検証する。

さらに、以上の量的研究から得られた成果に基づき，作品中の具体的な吹き替えの事例を取り上げ，日米間の翻訳の過程で音声非言語のどのような要素がどのように受容され，あるいは脚色されているのか，そしてその事象を招来する主な要因は何かについて実証的な解明を試みる。これらの考察を通して，沈黙を指標として大量の音声データの特徴を効率よく把握する分析方法を提示するとともに，音声非言語の吹き替えにおける日米間の翻訳態度の差異と特徴を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

まず，５つのジャンル（ドラマ，SF，アニメ，アクション，ホラー）ごとに、合計 60 作品の日米映画を選出する。作品の選択には， Internet Movie Database（IMDb）や Box Office Mojo など，日米の映画データベースの情報を用いる。相互の国で視聴されている 120 バージョン（原語版 60 バージョンと翻訳版 60 バージョン）の DVD を入手し，音声編集ソフト Adobe Audition の Loudness 機能を使って，全ファイルの音圧をそろえる。そして北米メディアの音量基準である broadcast safe を参考に，－40dBFS 以下が５秒 以上継続する状態として沈黙を定義し，dialnorm parameter に基づいて検出した沈黙の数と位置のデータベースを構築する。これを基礎資料として，120 本の日米映画における沈黙の数と位置の変化をジャンルごとに比較、分析する。

次に，分析の対象を他の言語（国）に広げる。具体的には，日米のアニメーション映画 20 作品（日本 10 作品とアメリカ 10 作品）を選出し，標準中国語（中国），韓国語（韓国），ドイツ語（ドイツ）フランス語（フランス），スペイン語（スペイン）への吹き替え版を入手する。これらの 130 バージョン（20 作品の 7 か国版で 140 バージョンとなるはずだが，10 バージョンは一部の外国語への翻訳版が制作されていなかった。）を対象に，ジャンル別の比較を行った時と同じ方法で、Adobe Audition を用いて沈黙の数と位置を検出し，主要な基礎情報をデータベース化する。そして，ここで取り上げた 130 バージョンに関して，映画の吹き替え版の制作過程における沈黙処理にどのような傾向が見て取れるかを、言語（国）別に明らかにする。

さらに，量的分析を質的研究へと深化させるべく，吹き替え版における沈黙の脚色に特色が見られる個別の作品を取り上げる。具体的には、原語版と吹き替え版の背景音楽や効果音，パラ言語などの音声データを，記述的な方法を用いて抽出した後，通時的分析等を行った先行研究の結果や、言語（国）・ジャンル別の比較および多言語間比較における量的研究から得られた成果、吹き替え版制作者から得た情報等を踏まえ，具体的な事例分析を行う。

４．研究成果

第１に，日米映画 120 作品を対象にした言語（国）間の比較からは，英語から日本語への吹き替えと，日本語から英語への吹き替えとでは，沈黙の脚色に明確な傾向の違いがあることがわかった。英日方向の吹き替えでは，沈黙の数と位置に大きな変化は生じず，比較的忠実な吹き替えが行われている。一方で，日英方向の吹き替えでは，沈黙の数は減る傾向が顕著である。次に，同じ言語（国）であっても，ジャンルによる不均衡があり，この差異は日英翻訳で特に大きいことが明らかになった。例えば，原語版で最も沈黙が多用されているのは，日本映画のホラーとドラマであるが，翻訳の結果，沈黙数が最も減るのも日本映画のホラーとドラマであることがわかった。また，アメリカ映画のホラーが日本語に吹き替えられる際には，逆に沈黙が増える事例があることから，非言語要素としての沈黙を最も活用していると考えられる言語（国）・ジャンルは，日本語版のホラーであることが示唆された。以上の結果から，日英間の翻訳版の制作過程においては、ローカリゼーションが、程度の差こそあれ、音声非言語要素を含めた多重コード全体に及ぶことが判明した。そして、その差異は、言語（国）だけでなくジャンルの影響を受けるという結論が得られた。

第２に，日米のアニメーション映画と，それぞれの作品の標準中国語（中国），韓国語（韓国），ドイツ語（ドイツ），フランス語（フランス），スペイン語（スペイン）への吹き替え版，合わせて 130 バージョンの比較からは，全体に共通した吹き替えの傾向は指摘できなかった。ただし，言語（国）別に個々の作品を分析したところ，次のような特徴を抽出することができた。まず，日本のアニメーション映画『千と千尋の神隠し』を対象にした事前の研究では，６か国の外国語吹き替え版の中で，原語版（日本）の沈黙が最も多く取り除かれていたのは英語版（アメリカ）であることを確認した。２位には、アメリカと同様に低文脈文化に属するドイツ語版（ドイツ）が続き、高文脈文化の国々は下位を占め、沈黙の削除が比較的行われないことがわかった。この結果は、先の言語（国）・ジャンル別の分析結果と軌を一にしている。沈黙を回避する方法としては，効果音や背景音楽などの音響操作とつなぎ言葉（充当詞）の挿入頻度が，新たなセリフを付加する回数を上回っていた。言語操作より音響操作の方が多かったわけである。この先行研究の結果を踏まえて，今回，アメリカのアニメーション映画 *The Lego Movie* を対象に，６か国語の吹き替え版の比較を行ったところ，次の２つの結果が得られた。（１）沈黙の回数と位置のパターンに従って，原語版を含む７バージョンを２つのグループに大別できることが判明した。すなわち，アメリカにアジア諸国を加えたグループと，ヨーロッパ諸国のグループであった。このことから，一定の流通ルートに沿って，地域ごとに共通の音源を使用していることが示唆された。（２）一方で，基礎データをより詳細に分析したところ，同じ音源を用いていても，言語（国）によって沈黙の頻度と配置には多少の違いがあることから，各国語版の制作過程で音声非言語要素に加えられる脚色にはそれぞれの言語文化等の特徴が反映していることがわかった。

第３として、日本の実写映画の英語版を取り上げ、作中の音声非言語（背景音楽，効果音，パラ言語など）をはじめとする多重コード全体に加えられた脚色について，英語版の音響編集担当者へのインタビュー等の制作情報を取り入れながら事例分析を行ったところ，次の結果が得られた。まず，監督をはじめとする原語版の制作者に対する敬意や契約上の制限から，映像の加工は施されず、セリフもオリジナル版に比較的忠実に翻訳しようという姿勢があったことがわかった。その一方で音声非言語には様々な脚色が施され、そこには原語版の音源の削除や

新たな音の付加、音圧の増加と低減等が含まれていた。こうした脚色が音声に加えられる主な要因として，目標文化側の観客にとって異質な音声（トンビの鳴き声や寺の鐘の音等）の排除や，映像（口の動きの有無等）に合わせた音声同期の原則の徹底，視覚的メッセージと聴覚的メッセージとの不一致（喜劇的な場面に響く凶兆としての効果音等）の解消という３つの吹き替えの方略があることを指摘し、その功罪を実証的に読み解いた。テクノロジーの発達に伴って、音声要素の「自然」な加工はますます容易になっており、今日では観客に気づかれることなく音声要素を思いのままに脚色することが技術的には可能である。本件で扱った日本映画に関しては、音声要素の操作が、作品が発信する情報量の減少や表現の単純化を招いた半面、明確化されたメッセージや違和感の少ない雰囲気づくりを通して、アメリカの観客にとって受容しやすい吹き替え版製作に寄与したことは肯定的に評価できる。

本件の成果は AVT における非言語要素の脚色に関する氷山の一角であり、まだ解明すべき点は多い。特に、現象を記述的に分析するだけでなく，なぜこうした現象が起きているのか，またその意義は何なのかという文化的・社会的背景につなげていかなければならなかったが、本件はその点に多くの課題を残した。マルチメディアの大衆化に伴い，言葉と映像，音響とが共同で意味を作り出す視聴覚メディア・テクストが，テレビやゲーム，インターネット，家電製品，広告等，生活の様々な場面で享受されている。同時に，文化や経済の国際化とともに， 映像メディアの翻訳の機会も増加している。こうした状況に鑑み、今後も、量的研究と質的研究の両面から視聴覚メディア・テクストの独自性に関する知見を蓄積しながら，文化的・社会的観点から AVT を包摂する主要な特徴を明らかにすることで、異文化コミュニケーションとしての翻訳学の発展に貢献できるよう努めていきたい。

References

Adachi, R. (2012). *A Study of Japanese Animation as Translation: A Descriptive Analysis of Hayao Miyazaki and Other Anime Dubbed into English*. FL: Boca Raton, Dissertation.com Publishing.

---. (2016). "Dubbing of Silences in Hayao Miyazaki's *Spirited Away*: A comparison of Japanese and English Language Versions". *Perspectives: Studies in Translation Theory and Practice*, 24(1): 142-56.

---. (2020). "Dubbing of Sound in the Samurai Movie *Love and Honor*, *inTRAlinea,* 22.

Bosseaux, C. (2018). Dubbing, In Pérez-González, L. (ed.), *The Routledge Handbook of Audiovisual Translation Studies*. London: Routledge.

De los Reyes Lozano, J. (2017). "La música referencial y su influencia en la traducción del cine de animación". *inTRAlinea,* 19, URL: http://www.intralinea.org/specials/article/2247 (accessed 24 March 2020).

Pennock-Speck, B., & del Saz-Rubio, M. M. (2009). "Voice-Overs in Standardized English and Spanish Television Commercials". *Atlantis: Journal of the Spanish Association of Anglo-American Studies*, 31(1): 111-27.

Sánchez-Mompeán, S. (2020). *The Prosody of Dubbed Speech: Beyond the Character's Words*. Cham, Switzerland: Palgrave Macmillan.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Reito Adachi	４．巻 22
２．論文標題 Dubbing of Sound in the Samurai Movie Love and Honor: A Comparison of Japanese and English Language Versions	５．発行年 2020年
３．雑誌名 inTRAlinea	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Reito Adachi	４．巻 57
２．論文標題 What happens to silences in audiovisual translation? A quantitative study of American and Japanese dubbed films（刊行予定）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Journal of Intercultural Communication	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 安達励人、栗原典子	４．巻 62
２．論文標題 幼児の国際理解演習の意義と課題について	５．発行年 2018年
３．雑誌名 倉敷市立短期大学研究紀要	６．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 安達励人	４．巻 61
２．論文標題 日米映画吹き替え版における沈黙数のジャンル間比較	５．発行年 2018年
３．雑誌名 倉敷市立短期大学研究紀要	６．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安達励人	4．巻 60
2．論文標題 The Lego Movieの翻訳過程における音声変化に関する一考察	5．発行年 2017年
3．雑誌名 倉敷市立短期大学研究紀要	6．最初と最後の頁 13-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安達励人	4．巻 29
2．論文標題 岡山県児童生徒文詩集『おか山っ子』の英訳の実践研究	5．発行年 2016年
3．雑誌名 学術，文化，芸術，教育活動に関する研究論叢	6．最初と最後の頁 57-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Reito Adachi	4．巻 24 (1)
2．論文標題 Dubbing of silences in Hayao Miyazaki ’s Spirited Away: a comparison of Japanese and English language versions	5．発行年 2016年
3．雑誌名 Perspectives: Studies in Translatology	6．最初と最後の頁 142-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/0907676X.2015.1024694	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安達励人	4．巻 59
2．論文標題 日米映画の翻訳における沈黙分析のための作品収集の課題	5．発行年 2016年
3．雑誌名 倉敷市立短期大学研究紀要	6．最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 安達励人
2．発表標題 邦画の視聴覚翻訳における聴覚非言語・パラ言語の脚色 ―『武士の一分』の場合―
3．学会等名 日本英文学会 中国四国支部 第69回大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 Reito Adachi
2．発表標題 The Problems and Possibilities of Using English Translations of Japanese Animated Works as EFL Materials for Japanese College Students
3．学会等名 Third International Conference on Language, Literature and Society 2016（国際学会）
4．発表年 2016年

〔図書〕　計2件

1．著者名 Reito Adachi	4．発行年 2021年
2．出版社 Grin Academic Publishing	5．総ページ数 200
3．書名 Descriptive Analysis of Sound and Silence in Audiovisual Translation of American and Japanese Movies（刊行予定）	

1．著者名 Reito Adachi	4．発行年 2019年
2．出版社 Lulu Press	5．総ページ数 51
3．書名 Translating Kumpei Higashi: Critical and Creative Approaches	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考